

子ども失ったたちの



ふくしまっ子自然体験事業がこの春改正され、交通費の補助がひとり1日2000円がひとり1回2000円になりました。この制度を利用していった保養団体にとってはたいへんな痛手です。先日、108団体の連名で、国に支援の継続を求める要望書を提出してきました。その時のわたしの記者会見での原稿を掲載いたします。

福島で保育士をしている辺見です。今日はいつも子どもや保護者と接して見えていることからお話しさせていただきます。まずは、5年前平成24年6月に議員立法で「子ども被災者支援法」が成立したことを改めて御礼申し上げます。そして、それが今も改定されたとは言え継続されていることに感謝いたします。福島の子どもたちを取り巻く環境は震災以来すっかり変わってしまいました。放射能の影響は福島を広く覆っており、6年たった今でも、震災前と同じ線量にはもどっていません。それにより、子どもの健康被害を不安に思う保護者は避難したり、福島での外遊びを制限したりしてきました。2017年5月福島県保育連絡会が発行した「福島の子どもたち」は「震災・原発事故から5年 福島の子どもたち」と副題がつけられ福島の子どもの現状を知ることができまます。はじめに、の冒頭部分で、事故当時1歳だった子を例にとり「原発事故はその子その大切な『1歳児らしい生活』を根こそぎ(!!)奪ったのです」と書かれています。本当にそうです。不安をもたずに福島で生活する、ということにはわたしには不可能ですし、ほとんどの方は口には出せませんが、多かれ少なかれそう思っていると思います。それは、不安や怒り・憎しみ・恐怖・悲

しみといった負の感情は、生き物が生きていくための、命を守るために必要な感情だからです。しかし、それは他人から承認されませんので、表に出できません。一方、ここにこ・元氣・やる気・まじめ・素直といった感情は他人から承認されませんので、表に出しやいのです。福島復興を、福島に住むわたしたちが喜ばないわけがありません。しかし、負の感情があるということをしちんと自分で統合できてこそ、感情を制御できるのであって、「不安に思うな」という方が無理なことなのです。先の白書には6年たった今でも、外遊びや自然とのふれあいが事故以前のところまでは戻っていないことを示しています。その原因として、物理的な環境だけでなく、「経験の継承」が行われていないことを第1にあげています。「たとえば虫捕り、散歩、外遊び、どれをとってもどこでどんな面白い遊びがやれるかという知識や方法は、年長のクラスから年少のクラスへ、先輩の保育者から新任の保育者へと受け継がれていくものです。1年、2年にもわたって、外遊びや自然とのふれあいが奪われたということは、その継承ができなくなってしまうことを意味しています。」もうひとつは子どもたちの「心の動き」であるとしています。

「桜の花びらが吹雪のように舞った時、誰ひとり関心を持ちませんでした。…当たり前のよう遊んだ自然遊びを子どもたちから奪ったのです。」

子どもたちの遊びの文化、そして、情動を奪った原発事故。それを取り戻すために、保育者たちは戦っています。わたしは、それを国や東電の責任だけとは考えていません。わたしたち大人ひとりひとりの責任であると考え、福島の子どもたちを片道



50キロ離れた米沢市まで無料送迎し、野外での遊びを中心とした保育を続けています。全国の保養団体の方々もきつと同じ気持ちではないかと思えます。子どもたちに何かしてあげることはいかとう立ち上がり、手弁当で活動が続けてこれています。このたびの改正で、交通費が削減されたことはかなりの痛手であったと察しています。福島の本当の復興には、それぞれの選択があつていいのだという基本的な人権を保障されることが必要不可欠だと思います。わたしたちが不安に思っている、少しでも線量の低いところで子どもたちが自然体験させたいという気持ちを理解していただき、支援の継続を強く望みます。 辺見妙子

寄付や支援をいただいた方々 5月確認分

- 支援金ー渡部 鋭幸様
- お米ー古野間 久様
- 玉ねぎーりずむ自然農園様
- ボランティアー細谷 洋一様

ご支援ありがとうございました。

gooddo 支援金 5月分

<ご支援金> 2,006 円 (税込)

<ご支援金詳細>

- 1、いいね!、商品購入案件 278 円
- 2、毎日クリック等 1,728 円

子どもたちへの支援が長くつづきますように:

